

ピーター・バーク／井山弘幸・城戸淳 訳 新曜社 定価 3,570円

知識と社会の相互関係を通史的に記述する快著である。著者はイギリスの著名な歴史家である。中世にはじまる知識の体系化の歴史を丹念に追いつつ、社会科学的アプローチを縦横無尽に駆使して、知識概念の変容や位置関係を把握しようとする。知識とは、そもそも何を指すのか。史的な解明作業によって、知識の持つ社会的位置付けや機能のみならず、その権力構造、経済構造までもが、見事に明らかになつていく。本書の持ち味は大きく三つあると思う。

一つは比較歴史学的手法により、知識と社会の相互作用を構造化する試みである。

中世の西洋において、伝統的に知識とは形而上に属するものであった。实用性や実践性と無縁であるがゆえに、正統性が維持されてきた。限られた特権階級に独占された知識は、大衆とは無関係

に存在するのが普通のことで
あつた。

むしろ一般からは隔離された「普遍的」知の組織化を図ることで、中世の政治権力は中枢的な機能を維持することができた。だが、このような構造を根底から覆す出来事が十五世紀に起つた。印刷技術の出現である。印刷技術以前と以降の知識社会の変容は本書の中心命題とするいえるであろう。

たとえば、教権の独占物であつた聖書は徐々に大衆に開放されていく。宗教改革を通じた意識の変革によつて、国民国家や資本主義といった近代精神の出現を見る。意識産業たる出版が中世の終焉をもたらした問題が、実に的確に素描されてい

本書の持ち味は大きく三つあると思う。
一つは比較歴史学的手法により、知識と社会の相互作用を構造化する試みである。

中世の西洋において、伝統的に知識とは形而上に属するものであった。实用性や実践性と無縁であるがゆえに、正統性が維持されてきた。限られた特権階級に独占された知識は、大衆とは無関係



知識の社會史

繊細な心配りがなされる。

一例として、中東地域との比較がある。周知のように、イスラム圏では歴史的に高い文明が

十世紀に入り、もつとも曰大化した組織が政府、そして企業であつたことにもよく表れてい
る。

一例として、中東地域との比較がある。周知のように、イスラム圏では歴史的に高い文明が形成されてきた。しかし、こと印刷技術に関しては抵抗感がきっかけで遅れることとなつた。アジアはさらに停滞した状態にあつた。しかし、そのようななかにあって、ほぼ唯一の例外として日本がある。本書では、折に触れて日本文化の独自性が効果的に強調される。当時の文献を使い、情報拠点であつた長崎出島等を分析することによつて、極東の島国が西洋文明を受け入れ、さらには西洋に文化を輸出する状況が描かれる。日本が近代以降、すぐれた経済発展モデルを描き得た素地も新知識原流となる一方で、伝統を美学受けだ。

三つ目は、「知識」という語を持つ本来的な意味内容に深い示唆を与える点にある。近代以降、次第に官僚制が知識権力の受容への姿勢にあつたというわ

消息となる一方で、知識を実学として捉えるもう一つの流れが形成されていく。このことは二

本書で展開される通史を俯瞰しつつ、今ある技術革新を見るならば、まったく新たな風景が浮かび上がる。知識・技術の背後に確かに流れる文脈が明らかとなるためである。解釈や意味付けを踏まえた新技術の評価は、数十年後に新たな歴史家によつてなされることであろう。そのとき、知識とは、変化に柔軟に対応し、成果に結び付けるための道具として記述されているのかもしれない。

十世紀に入り、もつとも巨大化した組織が政府、そして企業であつたことにもよく表れてゐる。すでに四〇年前に世界は知識社会への移行を開始したといわれる。新たな社会の主役は知識と技術を生産手段として活用し得る、個人としての知識労働者である。巨大組織に独占されたきた権力の源泉としての知識がより一般に開放され、個のネットワークを通じた革新が恒常的になされる社会となる。このことは、知識を有する個人が、生産手段のみならず権力や責任をも有する有史上初の経済社会の出現をも意味する。